HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	樋口一葉『大つごもり』に見る信用問題 ： 西鶴との比較を手掛りとして
Author(s)	桑原, 朝子; Kuwahara, Asako
Citation	北大法学論集, 73(2), 1-40
Issue Date	2022-07-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86452
Type	departmental bulletin paper
File Information	lawreview_73_2_01_Kuwahara.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　説

樋口一葉『大つごもり』に見る信用問題

―― 西鶴との比較を手掛りとして ――

桑　原　朝　子

序.

明治期において、日本は、西洋文化の圧倒的な影響の下に一気に近代化を試みるが、夏目漱石によって「皮相上滑りの開化」[1]と喝破された、その拙速なあり方は、多くの歪みを生んだ。漱石をはじめ、森鷗外や永井荷風といった、西洋文化に深く通じる一方で漢籍や江戸時代の町人の文芸にも親しんでいた一部の作家達は、この点に自覚的であり、その素養を活かしつつ、自らの生きる近代社会の問題を鋭く描き出した。本稿で取り上げる樋口一葉[2]（1872 ～ 96）も、近代化の問題点を極めて鋭敏に捉えた作家の一人であるが、一葉と彼らの間には、大きな相違も存在した。漱石らが、基本的には、明治期に整備された高等教育制度の恩恵を受け、さらには西洋諸国に留学したのに対して、一葉は、母の「女子になながく学問をさせなんは行々の為よろしからず」との意見により、満11

[1]〔夏目1911〕323頁。なお、引用文献の書誌情報は、全て末尾の引用文献一覧に譲り、注においては、原則として〔著者または編者の姓・初出年〕の形で略記した。但し、近世や近代の一次史料について現代の編纂物を利用した場合は、基本的に初出年ではなく編纂物の刊行年とした。

[2]「一葉」は小説を変名で発表するためにつけた筆名で、戸籍名は「奈津」である。また、和歌や日記には、「なつ」や「夏子」等の署名も見られるが、本稿では「一葉」に統一する。

歳で学校をやめており[3]、制度的には初等教育しか受けていない。この学歴の相違は、むろん当時のジェンダー・ギャップによるところが大きいが、女性であっても、ほぼ同時代に文壇で活躍した、若松賤子、三宅花圃、与謝野晶子らは皆、女学校の出身であり、少なくとも中等教育は受けていたため、一葉の経歴は、作家の中では異色と言える。このため、その知的基盤の大半は、14歳で入門した歌塾「萩の舎」で主に身につけた王朝文学と、小説を書き始めてから親しむようになった元禄文学を中心とする、前近代の古典によって形作られることになる。

当時の作家の中で、このような顕著な特徴を有する一葉が、とりわけ切実に捉えた近代社会の歪みの一つが、信用の問題であった。その背景には、信用を得られないことに長い間苦しみ続けた彼女自身の経験があり、この場合の信用とは、第一には金融であるが、それと関係する社会的信用や人格的信頼などを含む、広義のものである。早世した長兄の泉太郎に代わり、明治21年（1888）に家督相続し戸主となっていた一葉は、翌年、父則義が、出資していた東京荷馬車運輸請負業組合の設立に失敗し[4]多額の借金を残して病死したことから、その借金を返しつつ母多喜と妹邦子を養う責任を負わされ、定収入を得られない中で次第に窮迫し[5]、親戚や友人への借金の依頼や質屋通いに奔走するようになる。明治26年の夏には、金策が尽きて実業に就くことを決め、下谷龍泉寺町に小

---

[3]「塵之中」明治26年８月10日。以下、一葉のテクストについては、全て塩田良平・和田芳恵・樋口悦編の『樋口一葉全集』（筑摩書房）を使用し、頁数もこれによる。但し、旧字体は新字体に、変体仮名は正体に、それぞれ直し、濁点の省略や誤字などのために読みにくいことを理由として傍注が付されている箇所については傍注に従い、ルビも適宜付した。なお、一葉の年譜については〔台東区立一葉記念館2006〕104 ～ 108頁参照。また、実在の人物の年齢については数え年ではなく満年齢で表記することとする。

[4] 樋口家没落の誘因となったこの事業の失敗の詳細については、〔塩田1968〕176 ～ 180頁参照。

[5]〔野口1979〕348頁によれば、一葉が定収を得るために職業を持とうとして、萩の舎の師である中島歌子に相談したところ、歌子は知人に頼んで女学校へ就職させると約束したが、当時、女学校の教員は女子高等師範学校で養成しており、女学校すら出ていない一葉には不可能な話で、不調に終わったという。

さな荒物屋を開店するが、これも上手くゆかず、１年も立たないうちに店を畳んで文学のみで食べてゆく決意をし、本郷区丸山福山町に転居する。『大つごもり』はここで書かれたが、執筆の約１か月前の明治27年11月10日の日記には、「家は今日此頃窮はなはだし」[6]とあり、まさに困窮を極めていた時期であったと言える。その中から生まれた『大つごもり』は、一葉が金銭の問題を初めて正面から取り上げた作品であり、作家としての一葉のブレイクスルーを示すものと早くから認められてきた[7]。これ以降、『文学界』に断続的に掲載された『たけくらべ』が完結する明治29年１月までの14か月間は、『ゆく雲』、『にごりえ』、『十三夜』、『わかれ道』、といった傑作が次々と生み出されたために、「奇蹟の期間」[8]と呼ばれるほどである。

このブレイクスルーには複数の要因があると推測されているが、『大つごもり』は、完成された公刊作品の中では、井原西鶴の発想や文体を意識的に取り入れた最初のものであり[9]、西鶴の受容がその主因の一つであることは、テクストから明らかである。『文学界』の同人平田禿木からの明治27年10月18日付けの葉書[10]に、約束の西鶴全集を近々持参する、とあることから、この直後に西鶴を集中的に読んだと推測されており、この体験が、その後の一葉の作品のあり方を決定づけたと言えよう[11]。

---

[6]「水の上」明治27年11月10日。

[7] 例えば、一葉と親しかった馬場孤蝶の「故一葉女史」（〔野口1996〕所収、初出は1903）には、『大つごもり』が「作中の回転期」であるようだと述べられている。

[8]〔和田1954〕108頁。

[9]〔竹野1980〕111頁によると、未公刊作品まで含めれば、西鶴の意識的受容が初めて見られる作品は、明治27年10月から11月の執筆と推定される未定稿「やれ扇」であり、裏屋住まいの趣向とその文章に『好色一代女』の影響が著しく、題名の典拠は『日本永代蔵』巻1-2「二代目に破る扇の風」と推測されている。この「二代目に破る扇の風」については、一葉が常に愛誦していた、との真山青果の言がある（〔暉峻1948〕27頁）。なお、西鶴のテクストについては、基本的に小学館の『新編日本古典文学全集66～69　井原西鶴集①～④』を用いるが、これに収録されていない『西鶴織留』については、岩波書店の『日本古典文学大系48　西鶴集下』を利用する。

[10]〔野口1998〕141頁。

[11] 平田禿木「一葉の思ひ出」（〔平田1943〕所収、初出は1939）には、「近世物で

以上のような樋口一葉と『大つごもり』の位置付けに鑑み、本稿は、そのテクストの分析を通じて、一葉が捉えた当時の社会における信用、中でもこれをめぐる意識の問題を明らかにすることを試みる[12]。

また、テクスト分析に際しては、西鶴との比較を主たる手掛りとし、特に、時期によって作風に大きな変化が見られる西鶴のいかなる作品を受容したか、という点と、その上で、敢えて西鶴とは異なる選択をしている点に着目する。そこに、一葉が西鶴から受け継いだ問題意識と、西鶴の認識や思想との相違が、明確に表れるからである。

これに加えて、以下の二つの比較も副次的な手掛りとして用いる。一つは、一葉の日記に表れた、彼女自身の信用問題との比較である。日記からは、一葉が、信用の獲得に苦心しつつ、周囲の人々の信用に対する意識やその変化を鋭く感じ取り、この問題について考察を深めていった様子が窺え、それが『大つごもり』にも生かされているように見える。もう一つは、『大つごもり』の定稿と未定稿の間の比較である。現存する未定稿は、後半部分のみに関するものであるが、いくつかの箇所において、定稿との間に文言の実質的な相違が見られる。相違が存在する点は、一葉がとりわけ注意を向け、意図的に定稿の文言を選択した箇所と推測され、その意識を知る重要な助けになると考えられる。

は西鶴に最も傾倒してゐたらしく、帝国文庫中に覆刻された、ほんの流布本ながら、西鶴全集の二巻が『文学界』の方から女史の手へ行つてゐたが、これがあると実に気強いと始終云つてゐられた」(130 ～ 131頁) とあり、禿木の葉書での予告通り、『西鶴全集』が一葉の手に渡り、その後長く執筆を支えたことが窺える。また、一葉に親しく接した穴沢清次郎は、一葉が「小説家で、いちばん尊敬してゐたのは、西鶴でした」と述べている (〔穴沢1953〕112頁)。

[12] 本稿は、2021年10月２日にオンラインで行われたサントリー文化財団の第５回「信用の人類史研究会」における報告を、成立の直接の契機としている。本研究会の主査である齊藤誠教授や、当日のゲストスピーカーで準備段階から議論を重ねた木庭顕教授をはじめとする参加者の方々、及びその準備会の参加者の方々には、その質問やコメントが執筆の大きな助けとなったことにつき、心より御礼申し上げる。

Ⅰ．西鶴の受容と実体験の活用――素材・文体・視点

明治20年代は、近松門左衛門や井原西鶴を中心とする元禄文学が復興を遂げる時代であり、西鶴については、尾崎紅葉や幸田露伴などに、その意識的な受容が色濃く見受けられるが、一葉の受容のあり方は、極めて主体的であり独自性の強いものであった[13]。西鶴の影響が窺える一葉の作品の中でも、『大つごもり』は、その影響が文体に止まらず、思考内容にまで深く及んだ作品と考えられている[14]が、まず西鶴のどの作品を受容したか、という選択が注目に値する。趣向や表現の部分的な類似まで含めれば、『好色一代女』や『日本永代蔵』、『万の文反古』、『西鶴諸国ばなし』等の一部の話の影響も指摘されている[15]が、その全体的な構想や具体的な設定の決定において、「大晦日は一日千金」を副題とする『世間胸算用』を最も強く意識したことは、疑いないと言える。

金銭を主題とすることは西鶴の町人物に共通する点であり、『世間胸算用』に限ったものではないが、元禄５年（1692）に刊行され西鶴の晩年の文学的達成を示すといわれる本作品は、町人が才覚や倹約によって致富に至る成功譚を多く含む、貞享５年（1688）刊行の『日本永代蔵』とはむしろ対照的に、「算用」に失敗し苦境に陥った様々な町人達が、１年の総決算日である大晦日を何とか切り抜けようとするさまを描いたものである[16]。このことは、一葉が、ただ金銭の問題に大きな関心を寄せたというばかりでなく、実業を中心とする経済活動の成功者よりは失敗者、さらにはその姿を通じて浮かび上がる経済社会の問題点に、焦点を

---

[13] 明治20年代の作家による西鶴の受容の概観については、〔竹野1980〕45頁以下参照。

[14] 〔竹野1980〕112頁。

[15] 詳細については、〔竹野1980〕114～115頁参照。また、〔前田1974〕200～202頁が指摘する『西鶴諸国ばなし』巻1-3「大晦日はあはぬ算用」との関係については、後に詳しく検討する。

[16] 元禄２年以降の執筆と見られる『西鶴織留』巻３～６（『世の人心』、元禄７年刊）を契機とする町人物の作風の変化と、『世間胸算用』の評価については、差し当たり〔広嶋2011〕参照。

当てようとしたことを窺わせる[17]。

もっとも、『大つごもり』は、むろん西鶴の影響のみによって成立したものではなく、特に一葉自身の実体験がその中に存分に生かされていることは無視しえない。例えば、主人公お峯の下女奉公については、明治23年（1890）５月から９月にかけて一葉が萩の舎に寄宿し、下女同然に使われた経験が反映されている[18]と言われている。また、この間のことか否かは不明であるものの、一葉の姉弟子の三宅花圃は、萩の舎において集めた筆代の２円がなくなり、一葉が窃盗の嫌疑をかけられて「貧乏はつらい」と泣いていたことがあった、と語っており[19]、この経験がお峯の盗みのヒントになった可能性は高いと思われる。その他にも、『大つごもり』の叙述の各所に、日記と類似する部分を見つけることができる。また、『文学界』の同人馬場孤蝶は、「『大つごもり』の女中は実在の人物では無からうが、山村家を組上げる材料は一葉君の知人の家から十分得られたさうだ」と述べ、「一葉君の筆が熟するに従がつて、人物も材料も大抵は一葉君自身の目撃したものに限られるやうになつた」とも書いている[20]。こうした実体験とそれに裏打ちされた切実な感覚が、西鶴を受容しつつも、その単なる焼き直しとはおよそ異なる、近代社会におけるリアリティーをもった作品を生み出すことに寄与したものと思われる。

さらに、『大つごもり』の趣向や表現、プロット等には、西鶴以外の古典文学、例えば一葉が西鶴より以前から親しんでいた近松の世話浄瑠璃[21]

---

[17] 一葉が、『日本永代蔵』の中でも、一代で致富に至った町人の成功譚よりも、それを受け継いだ二代目が遊廓での遊びにはまって短期間に財産を蕩尽して零落する話に重点がある、「二代目に破る扇の風」を愛誦していたということも、そうした関心のあり方を示しているように思われる。

[18] 〔滝藤1996〕４頁。

[19] 三宅花圃「三宅花圃（抄）」（〔野口1996〕所収）154頁。

[20] 馬場孤蝶「一葉全集の末に」（〔野口1996〕所収）304頁。

[21] 明治25年９月18日の「につ記」には、近松の浄瑠璃集を読んだことが記されており、『大つごもり』に対する近松の様々な影響の可能性は、先行研究によって早くから指摘されてきた。例えば、〔湯地1926〕は、お峯が盗みをする場面について、「近松の世話浄瑠璃によく出て来る場面、心中の近因となつてゐる、

や、下層社会出身の下女を主人公とした同時代の文学[22]、犯罪者や下層民を描き、当時の文壇に大きなインパクトを与えつつあったヴィクトル・ユーゴーなどの西洋文学[23]の影響も、流れ込んでいる可能性がある。よって、そのテクスト内に、西鶴の作品や一葉の日記に類似の叙述があるからといって、直ちに西鶴の受容や実体験の反映とみることはできない[24]。そして、このように多様な素材に着想を得たと思われる趣向やプロット、設定等は、一つ一つを取り上げれば格別斬新とは言えないが、一見些細にも見える相違が相俟って、テクスト全体の印象や射程の大きさを著しく変え、『大つごもり』を独自の特徴をもった作品にしていると考えられる。

また、文体とその変化も、一葉の作品の独自性と、『大つごもり』におけるブレイクスルーに大きく寄与している。一葉の文体は、雅語や近世語を多く含む、和語と漢語の入り混じった独特の擬古文であり続け、

金に詰つて主家の金を盗む情景の描写等をまねたのではないかと思はれる様な書き振り」(202頁) と評しており、〔近石1959〕69頁は、西応寺の娘のもとから戻った御新造が、店の者にやかましく責めかける場面の言葉は、近松の世話物の店先を舞台にした場面によくある、と述べる。また、〔中込2002〕55頁は、恩ある者からの無心・盗みの擁護という展開や土壇場での救済が『大経師昔暦』と類似することに注目している。

[22] 特に、お峯と同じ18歳で旅館の女主人にこき使われている女中お文を主人公とした、馬場孤蝶の『みをつくし』(〔笹淵1973〕所収、初出は1894年９月～12月) は、〔岡1974〕72～75頁が指摘するとおり、『大つごもり』の創作に刺戟を与えたと考えられる。

[23] 当時の文壇におけるユーゴーの受容については〔木村2017〕参照。但し、原抱一庵による『レ・ミゼラブル』の抄訳「ジアンバルジアン」や、ユーゴーやディケンズの作品の紹介を行った無腸道人の『依緑軒漫録』を通じて、一葉がユーゴーの文学に触れていたことは日記の記載から窺えるものの、こうした翻訳や紹介自体が、ユーゴーの文学の重層性を十分に捉えておらず、バイアスのかかったものであるため、その影響を、原文を読みこなせた日本の古典の影響と同列に扱うことはできない。

[24] なお、日記については、馬場孤蝶「一葉全集の末に」(〔野口1996〕所収) 307頁が述べているように、そもそも文章の稽古のつもりで書かれており、それ自体一つの文学であって、実体験の忠実な記録では必ずしもないことにも注意が必要である。

歌のようなリズムを持つ。この点に関しては、主として萩の舎で培われた、王朝文学を中心とする一葉の知の基層[25]の影響が大きいように見える。但し、同じ擬古文といっても、初期の作品が、この知の基層を直接反映した王朝物語風であったのに対して、『大つごもり』の文体は写実的で西鶴風であると言われる。すなわち、一葉の初期の作品には、王朝物語に多用されている、敢えてぼかして丁寧にする朧化表現や間接話法がよく用いられていたのに対し、『大つごもり』は、冒頭で「井戸は車にて綱の長さ十二尋」(379頁) と非常に深い井戸であることを明確な数字で示すところから始まり、その後も具体的な数字が頻出し、「『量』と『物』の輪郭を鮮明に具えた世界」[26]が展開してゆく。但し、文体は西鶴の影響が最も表面に現れた点であるとはいえ、単なる章句でさえそのまま用いられていることは少なく[27]、一葉自身の個性を失ってはいない。

そして、この擬古的な文体は、その作品に、通常の近代小説とは異なる視点も齎しているように見える。一般的に近代小説では、語り手が作中人物とは切り離され、客観的に作中人物について語るが、一葉作品の語り手は、亀井秀雄氏が「作中人物に癒着的な半話者」[28]と表現するごとく、その観点が作中人物のそれから截然と切り離されておらず、作中人物の台詞も地の文に繰り込まれる形になっている。このような語り手のあり方は、西鶴・近松などの元禄文学や王朝物語の語り手の表現にも通じるものである一方、外から風景を俯瞰して歌を詠むのではなく、作中

[25] 萩の舎では、和歌をあくまで中心としつつも、歌詠一辺倒ではなく、作文や習字、『古今和歌集』や『源氏物語』をはじめとする古典の講釈なども合わせて行っていた(〔鈴木淳2003〕28頁)。また、平田禿木も、「樋口一葉全集『日記一』後記」(〔平田1943〕所収、初出は1941) において、一葉を「雑学の大博士」と評した上で、「平安朝の物語、随筆から入つて、和文系のものには当初から深い素養があり、その平安朝文学に関係の深い白楽天の詩文にも相当通じてゐたやうである」(187頁) と述べ、平安朝文学が一葉の知の基層であるとの認識を示している。

[26] 〔前田1974〕180 ～ 181頁。

[27] 〔竹野1980〕119頁。

[28] 〔亀井1983〕184頁。

に立って詠むという、一葉が萩の舎で身に着けてきた歌人の視点[29]をも思わせ、作中に描かれる下層社会などの内部に入り込んで物を見ているような臨場感を齎す効果を挙げていると言える。

Ⅱ．大晦日の意義――時間的設定

西鶴の選択的な受容と現実の問題に対する鋭い観察という特徴は、タイトルでもある大晦日という時間的設定にも表れている。この設定は、原稿が『文学界』12月号に掲載され、年始に発売される[30]ことを考慮したためでもあろうが、基本的には西鶴の『世間胸算用』に着想を得たものと考えられる。

もっとも、西鶴を受容する以前から、和歌を詠む一葉にとって、大晦日は１年の区切りとして重要であったと思われる。しかし、和歌の伝統と西鶴とでは、大晦日に見出す意義の内容が異なっていた。前者やそれを受け継いだ歳時記類においては、大晦日は、身を慎み神仏や祖霊を敬ったり、過ぎ行く時を惜しんで心のうちを歌に詠んだり、お餅やお節料理をはじめとする正月用品の準備をしたり、歳暮の礼に挨拶まわりなどをする日、とされていた[31]。これに対し、町人社会に生きる西鶴にとって、大晦日は、何よりも経済的に大きな意義を持つ決済の日であった。この経済的な意義は、近世における貨幣経済の発達によって、新たに大晦日に付されたものであり、当時は現金払いよりも掛け売りが多く、代金決済は、月末毎に払う晦日払い、盆暮の節季払い、あるいは暮のみの極月払いなどの形をとっていたために、商人にとっては、大晦日は１年で最も重要な掛け取りの日となったのである。明治期においても、このよう

---

[29] この点に関して、〔今井2009〕66頁は、中島歌子が、一葉の和歌の「秋はみえけり」という表現を「秋に成にける哉」と添削した事例を挙げて、歌子が一葉に作中に立って詠むことを教えた、と指摘している。

[30] 星野天知からの明治27年11月23日付けの書簡（〔野口1998〕121 ～ 123頁）に、既に受け取った『暗夜』に続いて、「来年始め売出すべき次号」に何か新作を出してほしいとの希望が綴られており、『大つごもり』はこれに応えたものと思われる。

[31] 〔竹野2004〕18 ～ 23頁。

な掛け売りの方法や大晦日の意義はすぐには変わらず、例えば明治34年（1901）に刊行された『東京風俗志』中巻には、歳の暮れの商家は「盆以来の総勘定をなさんとて、市中の景色何となく騒々しげなり」[32]とある。但し、西鶴が『世間胸算用』で中心的に描いたのは、総勘定をして大晦日を無事に過ごす商人よりも、神仏や祖霊を敬い述懐の歌を詠むような精神的余裕も、正月仕舞いや歳暮の礼をするような金銭的余裕もなく、払いきれぬ債務を抱えて掛け取りを何とかして逃れようと策をめぐらす貧しい町人達であり、わずかに正月仕舞いを描いているケースでは、貧富の格差を鋭く形象化していることが分かっている[33]。

西鶴の作品と同様に、『大つごもり』においても、大晦日は第一に決済の日で、山村家にとっては「大勘定」（393頁）の日である一方、安兵衛一家にとっては、借金の利子の支払い期限の日である。両家の正月仕舞いについても多少描かれているが、山村家では、御新造がお節料理に使う田作（ごまめ）をむしり（388頁）、娘達が早くも「追羽子」（390頁）、すなわち羽根突きをしているのに対して、安兵衛一家では、大晦日が近づいても借金の利子が支払える目途が立たず、正月の雑煮用の「大道餅」（386頁）さえ買えないありさまであり、やはり貧富の格差が強調されている。

『世間胸算用』巻1-1「問屋の寛闊女」の冒頭には、「世の定めとて大晦日は闇なる事」とあり、特に年越しの金策に追われる貧しい者達にとって、大晦日は苦しい闇の日であるとの認識が示されるが、同時に、この話の末尾は、「一夜明くれば、豊かなる春とぞなりける」と締め括られており、この日さえ越せば豊かな春がやって来る、という一陽来復の思想も窺える。『大つごもり』においては、末尾は「後の事しりたや」（393頁）、とその後については詳しくは明示せず、読者の想像に委ねる形になっているが、この一陽来復の思想も基本的には生かされているように見える[34]。安兵衛一家は、「をどりの一両二分を此処に払へば又三月の

---

[32] 〔平出1901〕67頁。

[33] 〔竹野2004〕24 ～ 25頁。

[34] 本稿とは若干ニュアンスを異にするが、〔滝藤1996〕２頁もこの点に着目し、『世間胸算用』巻1-1に見られる一陽来復の思想を「日本人の庶民感覚の現れ」と捉えた上で、『大つごもり』にもそのような感覚と新春への祝福が込められ

延期(のべ)にはなる」(386頁) というように、お峯が盗んで渡した金銭によっても、借金の返済を３か月引き延ばせるに過ぎず、問題が全て解決しての大団円とは程遠いが、ともかくも石之助の助けによりお峯は詮議を免れ、安兵衛夫婦と三之助は笑顔で正月を迎えられるからである。『大つごもり』は、この経済的にも思想的にも重要な区切りとなる一日をめぐる時間を、明日をも知れぬ生活を送るがゆえに、一日一日を乗り切ることが決定的となる貧困者の時間感覚でもって、見事に切り取っていると言える[35]。

Ⅲ．物語の舞台としての東京――空間的設定

『世間胸算用』などの西鶴の浮世草子が、主として京都や大坂を中心とする上方の都市を物語の舞台としたのに対し、一葉は、自らの暮らした東京を描くことが多く、『大つごもり』も東京を舞台とする。前掲の『東京風俗志』の上巻には、「都下には地方に於いて見ること能はざるが如き、富者の奢侈を競ふものあるに反へて、貧窶殆どまた地方に見るべからざる惨状を極むるものの夥しきを見る」[36]とあり、当時、東京は全国の中で貧富の格差が最も激しい地域であった。『大つごもり』は、その地理上の貧富のコントラストを上手く生かしている。一葉は、東京の内部で引っ越しを繰り返し、生涯で15か所に住んだ[37]が、テクストに出て来る地名は、いずれもその住んだ場所または生活圏の中にあった。よって、実際上の観察に基づいて把握した各地の特徴を利用しつつ、安兵衛一家関連の地域、山村家関連の地域、山村家の内部で対立を創り出している総領息子石之助の遊び先関連の地域、という地理的な対立構造を描き出したことが窺える。

ているとする。

[35] 和歌をはじめとする抒情詩には、決定的な瞬間に意識を集中し、それを切り取るという側面があり、『大つごもり』の時間設定には、一葉の歌人としての感覚も生かされていると考えられる。

[36] 〔平出1899〕21頁。

[37] 〔台東区立一葉記念館2006〕103頁。

まず安兵衛一家関連の地域では、その住居がある小石川初音町は、「貧乏町」(381頁) と言われているとおり貧民の多く住む地域であった[38]が、商業は盛んであったようである[39]。八百屋を営む安兵衛の得意先は、この初音町に接する本郷区の「田町より菊坂あたり」(382頁) であった。安兵衛が借金をした高利貸の居所もある田町は、商家が並び立っているところで、菊坂も、寺院の他はたいてい商家で、学生が寄宿する下宿屋も多く、初音町ほどの貧乏町ではないとしても、大邸宅の多い屋敷町ではおよそなかった[40]。なお、八百安の買い出し先の「神田」(382頁) は、大きな青物市場があることで知られており、また青物以外の問屋も多く、一葉自身も、荒物屋を開いていた頃に商品の買い出しに度々出かけている[41]。

一方、山村家関連の地を見ると、山村家及びその貸長屋百軒がある「白金の台町」(385頁) は、寺院や屋敷地が多く商家は非常に少ない地と言われている[42]。また、町内で一番の財産家 (379頁) とされる山村家には、「麹町の御親類」(383頁) がいることが、お峯の話から窺えるが、当時、

---

[38] 『国民新聞』明治23年６月20日号に掲載された「窮民彙聞」には、「小石川区内久堅、餌差、掃除、初音、大塚窪の町々窮民散在し中には紙屑拾ひ下足直し等多く窮苦に迫り米価の昇るにつれ三度の食事も儘ならぬまゝ二度と減じ一度と下り衣類等は大概皆な典売し稍(やう)やく露命をつなげる有様なり」とある。

[39] 〔東陽堂1906〕26頁に、小石川初音町は「商業殷賑なり」とある。

[40] 〔東陽堂1907〕によると、本郷田町については、「当町の過半は商家櫛比せり」(20頁) とあり、本郷菊坂町については、「当町は、寺院の外大抵商家にて、附近に学生の寄宿せる下宿屋多きを以て随て繁昌せり」(12頁) とある。

[41] 〔東陽堂1900〕には、「神田市場は、各菓物青物市場の中枢として、その繁栄なる、日本橋の魚市場にも譲らざるなり。五ヶ町の菓物青物問屋二百四十戸、乾物店三十七戸、荒物問屋二十三戸、荷車問屋四十七戸、飲食店十二戸を一団とせる一大区域は、神田市場として、市内目ぬきの場所柄なり」(20頁) とある。また、一葉の「塵中日記」の明治26年８月から12月頃の記事には、神田に買い出しに行ったという記述がしばしば見られる。

[42] 〔東陽堂1902b〕には、白金台町は「芝区の南西隅にして。其の地郡部に接するを以て。繁華ならず。道路の左右共に寺院幷に屋敷地多く。商家は甚た少し」(24 ～ 25頁) とある。

麹町は、皇族・華族・官吏などの屋敷地が多い高級住宅地であった[43]。石之助は、父親の前で「親類の顔に美くしきも無ければ見たしと思ふ念もなく」(390 ～ 391頁) と述べているが、親類を嫌って「裏屋の友達」(391頁) との約束を優先させるのは、親類に父母と同様に裕福で類似した考えの者が多いからでもあろう。山村家の娘の嫁ぎ先の西応寺町、現在の芝の辺り[44]も、麹町のような高級住宅地ではないものの、繁華な地ではない[45]。山村家関連の地域のみが、基本的に商業との関連が薄いことは、他の地域とのはっきりとしたコントラストをなす。

山村家の総領息子でありながら両親に歯向かう石之助の遊び場所は、いずれも白金台町に比較的近い地域である。まず、品川は、近世において東海道の第１の宿駅が置かれ、宿場町として栄えたが、吉原と並び、遊廓のある場所としても知られていた。明治に入っても妓楼は残り、明治末期になっても貸座敷60戸、引手茶屋18戸、娼妓530人ほどが存在したという[46]。但し、石之助は、近松の世話浄瑠璃に登場する放蕩息子などとは異なり、「騒ぎは其座限り」にして遊女に入れあげることはせず、むしろ「車町の破落戸(ごろ)」や「伊皿子あたりの貧乏人」に椀飯振舞をすることを道楽としている(387頁)。この芝車町と伊皿子町は境を接しており、芝車町は、赤穂浪士の墓がある泉岳寺という名所を含み、品川停車場にも近く、鉄道馬車が頻繁に往来し、海をのぞむ割烹楼などもある賑やか

---

[43] 〔平凡社2002〕の「麹町」の項目参照。但し、街道筋についてのみは、江戸時代以降、商家が多く、明治期に入っても商業地としての性格を持っていた。

[44] 芝区は一葉の次兄の虎之助が長く住んでいた場所であり、石之助が虎之助をモデルにしているとする説も多いようである(〔滝藤1996〕３頁)。住所や放蕩を始める年齢といった形式的な設定や表現の一部について、虎之助のあり方から着想を得た可能性は高いが、後述のごとく、石之助の性格や意識は、一葉が実業に就こうとした時に、自らには関係のないことと一切の援助をしようとせず、上手く行かずに「かしらを下げて来る事あらば母をも其方らをもやしなひては取らすべし」(「につ記」明治26年７月11日) と冷ややかに述べた虎之助とは、むしろ対照的であると言える。

[45] 〔平凡社2002〕の「芝西応寺町」の項目参照。

[46] 〔東陽堂1910〕４頁。

な所であった[47]。伊皿子町は、三井財閥の十一家の一つである伊皿子家の大邸宅などがある一方、地形的に屈曲が多く道路が甚だ錯雑しており[48]、細い道の裏などに貧しい人達も少なからず住んでいた[49]と推測される。

この地理的設定を金銭の流れと重ねて見ると、安兵衛のような初音町の裏店の住人や伊皿子の貧乏人ほどの貧困者ではないとしても、経済的にそれとさほど変わらない、社会の下層からせいぜい中流にある白金台町の長屋の住人から、経済的に豊かな家主の山村家に賃料として金銭が集められ、その一部が、石之助を通じて、より貧困者の多い地域の貧しい人々に流れて行っている、と言える。

Ⅳ．テクストに表れた信用問題

主として西鶴の受容と自身の経験に基づいて考え抜かれた、以上のような時間的・空間的設定のもとに、『大つごもり』は、明確なコントラストをなす登場人物達の描写を通じて、当時の社会が抱えていた信用をめぐる問題を浮き彫りにしてゆく。よって、以下では、基本的に各登場人物に沿って、信用に関する個別の問題を見てゆくこととする。

---

[47]〔東陽堂1902a〕には、「芝車町は旧江戸入口にして。今も品川停車場其の近きに在り。鉄道馬車も頻繁に往来し居り。殊に四十七士の墓といふ名物を有し居れば。日を逐ふて益々繁栄す。其の海浜に枕める割烹楼なと。眺望甚だ奇なり。元旦及び二十六夜は特に宴客多し」(21頁) とある。

[48]〔東陽堂1902a〕に、「芝伊皿子町は。東南の二面は田町八丁目九丁目と車町に其の界を交へ。西は高輪台町と同西台町に接し。北は三田台町一丁目二丁目に隣り。屈曲多く道路甚た錯雑せり」(19頁) とある。三井家の大邸宅については、〔平凡社2002〕の「芝伊皿子町」の項目参照。

[49]〔松山2014〕第４章によれば、明治初期に東京府によって行われた「新開町計画」は、場末の町人地の住民を相対的に富裕な地主層とそれ以外の借地人・借家人層に峻別し、中心部寄りの武家地に前者のみを移住させ、都市空間における貧富の住み分けを志向するものであったが、この計画において、芝車町と芝伊皿子七軒町は西久保地域への移転元となっている。よって、相対的に貧しい借地人･借家人層がこれらの町々に取り残されたことも､貧民の多い地域となった一因ではないかと推測される。

1．都市の大家主としての山村家

山村家については、テクストの冒頭において、「受宿の老媼」(379頁)の言葉で簡単に紹介されているが、家内には、大旦那と後妻の御新造、前妻の子である総領息子の石之助、御新造の子である末の娘２人がおり、その他に、既に他家に嫁すなどして家を出ている大旦那の子が３人いることが分かる。白金台町で一番の財産家で、かつ町内一の吝嗇であると見られている山村家の収入の中心は、同じ町内の貸長屋100軒の家賃収入である。都下の宅地と家屋は所有主が異なることも稀ではなく、山村家についてはっきりしているのは大家主であるということのみだが、当時は、数千坪程度までの小規模土地所有者が貸家経営を行う例が圧倒的に多かった[50]ことに鑑みると、恐らく地主でもあるという設定であろう。

また、お峯が手を付けた懸け硯の中の金が、「屋根やの太郎に貸付のもどり」(393頁)、とあり、この貸付の性質が不明であるため、山村家は金貸しも副業として行っている、という可能性を完全には否定できないが、「去歳(こぞ)にくらべて長屋もふゑたり、所得は倍に」(387頁) と噂されていることからも、貸家による家賃が基本収入であることは確かである。当時の東京の貸家経営の利益率は極めて高かったと推測されており[51]、実際、一葉の近くにも、貸家業で一財産を築いた大家主がいたことは、明治21年 (1888) から23年の頃に書かれた一葉の雑記の中の「大崎某ノ物語」[52]と題された短い文章から窺える。この中で、「大崎某」こと大崎辰五郎は、本郷菊坂辺りの地代の安い所を選び、借地上に貸家２軒を建てることから始めて、徐々に家屋を増やし、10年後には本郷台町・菊坂近辺に家屋200戸余りを有し月収70円を得るようになった、とされているが、その15年以上後の明治39年の史料[53]には、年々借り手も増えて、今では財産の地所家作は10万円くらいになり、月収は2000円以上を得ている、と書かれている。但し、それによれば、この大崎が有名であったのは、単に資産家であったからではなく、長屋の借り手が貧困者である

---

[50] 〔鈴木博之1999〕188 ～ 191頁参照。

[51] 〔橋川・粕谷2007〕38 ～ 39頁 (粕谷誠執筆)。

[52] 〔塩田・和田・樋口1978〕580 ～ 581頁。

[53] 〔東陽堂1906〕31 ～ 32頁。

ことを考えて、木材を安い時に買い込み、安上がりに家を建ててできる限り安く貸し、自ら長屋を見回り修繕する一方、毎年梅雨の時期などに、店子１戸につき３升宛の白米を施与していたからであるようで、収入の半分は慈善費用に費やしていたという[54]。

山村家がいかにして財産を築いたかについては、定稿には明示されていないが、未定稿には、大旦那が石之助に「五十円束一つ」を与えながら、「なきお袋が年月の苦労、ちりよりつみての身代」（398頁）と述べている部分がある。よって、少なくとも執筆を始めた当初においては、山村家は元来の素封家ではなく、大崎のように貸家業で徐々に財をなしてきたという設定であり、「なきお袋」、すなわち石之助の母が、いわば糟糠の妻のような存在であったことになる。このように貸家による蓄財という点では、山村家のあり方は大崎に近く、当時の現実を踏まえていると言えるが、ここで、より注目に値するのは、一葉が、山村家には大崎のような性格ではなく、むしろそれとは対照的な守銭奴に近い性格を与え、御新造や大旦那が直接お峯を助けるという筋書きは決してとらなかった、ということである。一葉は、大崎という個人が毎年店子に白米を施与するということについては、「仁慈も致れる也」[55]と評価している。しかし、一般に、裕福な家主が貧乏な店子に恵むという形の贈与、さらには土地の関係に基盤を置く地主ないし家主層が直接貧しい借家人層に資金援助をするという構造が齎す問題を重く見ており、少なくとも構造的にはこのあり方をとるべきでないと考えていたと思われ、この点は、後述のごとく、石之助に関する記述にさらに明瞭に窺える。

そして、山村家に敢えて与えられた守銭奴的性格は、御新造に最も強く表れる。御新造は、冒頭から一貫して、気まぐれで自己中心的な上に極度の吝嗇であると描かれ、そのためにお峯を苦しめ、またお峯が働く以前にいた下女達もこれに耐えられずに逃げ出している。特にその極度

[54] 大崎自身は、その自伝（〔大崎1903〕）161頁において、下等の長屋を拵えた訳は、「世間を見ると、昔の家を潰していい家を拵えるので、段々下等民の住まう所が無くなる。ドウかして下等民に貸して下等民の便利を図り、そうして自分の商法も立てたい」と思ったからである、と述べている。

[55] 〔塩田・和田・樋口1978〕581頁。

の吝嗇については、ユーモアを込めて語られており、致富に至った町人達の様々な倹約ぶりを滑稽な具体例を用いて描いた西鶴の影響を思わせる[56]が、同時に、この吝嗇が発揮されない局面、これを上回る強い力や論理が働く場合がある、ということも見逃せない。それが血を分けた娘達への強い情、あるいは血縁の論理である。他人に対してはけちな御新造だが、７歳の娘には「踊り」(380頁) を習わせ、「花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖」(388頁) とあるように、娘達の新春の晴着は物惜しみせずに新調し、大晦日に西応寺の娘のお産に呼ばれれば、家内の金を気にしつつも「恩愛の重きに引かれて」(389頁) 駆けつける。しかし、この御新造の血縁の情、あるいは血縁の論理への固執こそが、血を分けたわが娘に家督を継がせたいあまりに、道理を枉げて義理の息子石之助を山村家から追い出そうとする算段にも繋がってゆく[57]。換言すれば、御新造にとって、血の繋がらない他人は信用できないのであり、この意識は、その吝嗇で即物的なあり方とも関係していると考えられる。

もっとも、この血縁の情は御新造のみのものではなく、そのために疎まれた石之助の側にも全くないわけではないように見える。石之助は、10年前に、「これを養子に出して家督(あと)は妹娘の中にとの相談」(386頁) を聞いて放蕩を始めるが、その際、「思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて」(386頁)、と継母と父とを分けて書いてあり、継母を苦しめたくても必ずしも父を苦しめたいわけではなく、父の愛情は依然としてどこか期待している、という心情が窺える。

しかし、その後に書かれる大旦那の態度は、石之助の淡い期待を裏切るものである。大旦那は、「受宿の老媼」に「甘い方」(379頁) と評されているように、御新造のような極度の吝嗇ではないが、信用をめぐる根本的な意識のあり方は、御新造と似ており、石之助とは鋭く対立する。

---

[56] 例えば、『日本永代蔵』巻1-2「二代目に破る扇の風」の前半部には、このような笑いを誘う倹約の具体例が描かれている。

[57] この点は、例えば、御新造ほどあからさまに外には出さないものの、明治40年に発表された夏目漱石の『虞美人草』の、義理の息子甲野欽吾を廃して実の娘藤尾に家を継がせようと画策する藤尾の母を想起させる。御新造の意識が決して特異というわけではなく、それだけに厄介な問題であることが窺える。

石之助にねだられて「金庫の間」から「五十円束一つ」を持って来る場面（391頁）によく表れているように、自宅に多くの現金を抱え込み、また実物資産としての不動産をつかんでいる大旦那には、蓄積した金銭を預金したり、株式に投資したりする、すなわち金融資産の形にして外に出して回す、という発想はないのである。

このような大旦那のあり方に対して、一葉は、容赦のない批判の目を向ける。地域社会に根付いた大家主としての立場も関係してか、「世間」の評判を気にする大旦那は、石之助に、「天魔の生れがはり」、「悪者（わる）」、といった言葉を投げつける一方で、「此山村は代々堅気一方に正直律義を真向にして、悪い風説（うわさ）を立てられた事も無き筈を」と述べる（391頁）。しかし、それ以前の部分で、山村家は町内一のけちであるとか、「世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ」（380頁）など、散々な噂が立っていることが示されているだけに、それに気づいていない大旦那のこの発言には、強烈な皮肉が含まれることになる。この一節は、大旦那が石之助の生き方との対比において山村家代々のあり方を評したものであり、確かに石之助と異なり、山村家は代々「破落戸（ごろつき）」（391頁）などとの付き合いはなく、博奕にも手を出して来なかった、という点で「堅気」ではあり、あからさまに詐欺的な商売をしていない、という意味では「正直」かも知れない。しかし、山村家の「正直律義」は、自己の利益を着実に追求するという信条に忠実である、という方向にむしろ発揮されており[58]、その財産は、「悪い風説」が示唆するように、貧しい借家人や下女などの弱い立場の者を踏みつけにして顧みないあり方の上に築かれたものに見える。

そして、このような山村家の描き方は、一葉が、西鶴を受容しつつも、西鶴とは意識的に異なる立場をとった点としても注目される。金銭を主題とする西鶴の町人物には、先述のように、時期によって変化が見られるが、致富に成功するか否かはともかく、西鶴の関心の中心は一貫して

[58]「正直」の語は、「正直安兵衛」（381頁）や「正直は我身の守り」（393頁）という形で安兵衛やお峯についても使われており、敢えて同じ語を使うことで、その内実の相違が強調されている。

商業にあり、「金銀はまはり持ち」[59]という認識を示す。よって、基本的には、山村家のように家に現金を貯め込むなど、資産を抱え込んで外に回そうとしないことについては否定的である[60]。また、そもそも商売ではなく家賃や家質を取ることによって蓄財することにも批判的であるが、晩年の作品になるほど、資本を持たない商業の限界が繰り返し語られるようになる[61]のと裏腹に、この批判は若干弱まる傾向がある。すなわち、『日本永代蔵』巻4-1「祈る印の紙の折敷」には、町人が「棚賃（たなちん）・貸銀（かしがね）の利づもりして、あたら世をうかうかと」送るのは「天命」を知らない行為である、とする記述さえ見られたが、『西鶴織留』巻6-4「千貫目の時心得た」では、銀千貫目を貯めた商人が、商売をやめて財産を子に譲り、十貫目以上の家質以外には貸さないように言い含め、その通りにした子の代にはさらに富裕になったことを肯定的に書いている。すなわち、商業によって蓄積した金銭を不動産へ回す、というあり方を認めているのである。これに対して、一葉は、逆に、山村家が貸家という不動産を基盤にして蓄積した金銭を、石之助を通じて、安兵衛のような零細な小商人の商業なども含む、別の経済活動へと回す、という新しい信用

---

[59] 『日本永代蔵』巻4-1「祈る印の神の折敷」。『世間胸算用』巻5-4「長久の江戸棚」にも「世は回り持ちのたから」という同様の表現が見られる。

[60] 『日本永代蔵』巻6-2「見立てて養子が利発」では、才覚のある小者が、主人が５年間家内に取り置いたという金子百両を見て、「さてもさても商下手なり。包み置きたる金子は、一両も多くはなるまじ。利発なる小判を長櫃の底に入れ置き、年久しく世間を見せ給はぬは、商人の形気にあらず」と述べており、主人がこの小者を養子にしたところ、「やうやう三千両の身代」を15年経たぬうちに「三万両の分限」にしたという。

[61] 資本の重要性については、『日本永代蔵』において、既に「ただ銀（かね）が銀をためる世の中」（巻2-3「才覚を笠に着る大黒」）といった表現で示されているが、一方で無資本でありながら才覚や倹約で致富に至った話も散見する。しかし、『世間胸算用』や『西鶴織留』巻３～６（『世の人心』）等の晩年の作品では、商業による致富の成功譚がそもそも少なくなり、「銀で銀まうくる事ばかりにて、ただとるやうな事はひとつもなし」（『世間胸算用』巻4-4「長崎の餅柱」）、「利発才覚ものよりは常体（つねてい）の者の、質（もとで）を持たる人の利徳を得る時代」（『西鶴織留』巻6-4「千貫目の時心得た」）など、商人の成功には資本が必須であることを明示する表現が目につく。

のあり方を描き出した。一葉は、商業によって広く社会に金銭を回すという西鶴の関心を受け継ぐ一方で、西鶴と異なり、不動産を基盤とするあり方には一貫して非常に警戒的であると言える。それは恐らく、不動産の場合には、その所有権を笠に着て立場の弱い賃借人等から搾取しようとする面が強く表れやすいことを見抜き、これが大きな問題であると感じたためと思われる。この点を西鶴はあまり問題としなかったことは、その作品において、基本的に他人を顧みずに私利を貪欲に追求する態度が非難されることはなく、明らかな偽物を売るといった人外のことをしない限り、狡猾な方法も肯定され、むしろ相手の苦境など構わずに自らの利益を確保する者こそ「商巧者（あきなひごうしや）」であるとの記述[62]が見られることからも窺える。しかし、この問題を軽視すれば、信用を社会に広く行き渡らせることが難しくなり、長期的には、およそ信用を得られず経済活動を自立して行えない者が増え、経済社会に負の影響を齎すと考えられる。よって、山村家の人間でありながら大旦那や御新造とは鋭く対立し、弱者をも対等に尊重しつつ、不動産を基盤としない経済活動に広く信用を与えようとする石之助の存在が、決定的な意義を持つことになるのである。

２．安兵衛一家の貧窮と信用問題

経済的には豊かでありながら、内部に深刻な対立を抱え込み、ぎすぎすとしたこの山村家と、様々な点で対照的であるのが、安兵衛一家である。両親を早くに亡くしたお峯は、この母方の伯父夫婦を「親」、その息子三之助を「弟」のように思っており（384頁）、この一家の一員と言える。安兵衛は八百屋を営み、貧しいながらも生計を立て、息子も何とか学校に通わせていたが、病にかかって働けなくなったことから窮迫し

[62]『日本永代蔵』巻5-2「世渡りには淀鯉のはたらき」には、「商巧者」の言として、「掛乞の、無常を観ずる事なかれ」とあり、掛け取りに際しては、相手の苦境等に心動かされることなく、冷静に狡猾な工夫をしてまでしっかり取り立てることが肯定されている。但し、このような考え方自体が大きく変化するわけではないものの、『世間胸算用』をはじめとする晩年の作品になると、狡猾な工夫を凝らす才覚ある商人よりも、払い切れぬ債務を抱えて苦境に陥っている者の方に、関心の重点が移ってゆくことは、注目に値する。

てゆく。商売道具の天秤まで売り、表店の暮らしが立ち行かなくなって、「月五十銭の裏屋」(382頁) に引っ越すが、この頃の東京の家賃として、「月五十銭」は、ほぼ最低に近い価格である[63]。

そして、安兵衛一家の貧窮を決定的にしたのは、高利貸からの借金であった。蓄えのない貧民にとって融通機関の必要性は高く、当時は、日済(ひなし)・月走・烏金・質屋などの、高利の短期信用に特化した、貧民を主たる対象とする融通機関[64]が存在した。しかし、信用の供与においては、貸し手の資質、特に貸し手が借り手にいかなる態度をとるかが重要な問題であり、こうした融通機関は、自律的な商業活動を支えるのに必要な、高度なモラルを有する専門家集団などではおよそなく、この点において極めて大きな欠陥を抱えていた。一葉とも面識があり、当時の下層社会のルポルタージュを書いた横山源之助は、東京や大阪などの都会の貧民をさらに不如意にしているのは、まさしくこのような融通機関の問題で、中でも「貧民に対して不人情不道理の行為もこれを嫌わず貪欲鬖くなきこと」[65]に表れている、「貸金者の資格の不完全なるは、最も欠点とすべし」[66]、と述べている。特に、田町の高利貸が、安兵衛に、「をどりの一両二分」(386頁)、すなわち１円50銭を払わせて借金の返済を先延ばしする、という形で金を借り換えさせているように、こうした高利貸が、借り手の懇願に任せて、敢えて新たに金を貸し続けることは致命的な問題であり、これが実質上、非常な高利に繋がってゆき、蟻地獄に落ちる

---

[63] 〔横山1899〕によれば、東京の三大貧民窟は四谷鮫ケ橋、下谷万年町、芝新網であり (27頁)、明治31年２月の調査では、万年町と新網の表店の家賃が月１円20 ～ 30銭、裏店が65 ～ 70銭程度で、東京市中で最低の家賃は、鮫ケ橋の38銭という例であろうという (54頁)。

[64] 〔横山1899〕55 ～ 57頁。日済は、例えば１円の貸借を証書上は１円20銭とし、日々４銭ずつ払って済(な)しくずすものであり、月走は田町の高利貸と基本的に同じ方法で、証書の金額を１円とすると20銭天引きされ、正味80銭を借りて１か月後に１円にして返すというものである。烏金は、朝若干の金銭を借りて夕暮れにこれを高利と共に返すという、非常に短期の信用であった。

[65] 〔横山1899〕377頁。

[66] 〔横山1899〕378頁。

ように借金から抜け出せなくなる仕組みになっていた[67]。田町の高利貸の場合、安兵衛に対して、最初は３か月の期限で証書上は10円貸し付けるとした上で、実際には利子１円50銭を天引きし、証書上は15％だが実質は約18％の利子分を３か月後に払わせ、表向きは借り換えさせたようにして、当時の利息制限法の「元金百円以下ハ一ヶ年ニ付百分ノ二十」[68]という制限を超えていないように見せている。しかし、もし安兵衛が元金を返せず３か月ごとに利子分を払い続ければ、実質８円50銭の貸付に対して年６円、すなわち約70％もの高利を払うことになりかねないのである。

日済や烏金等の高利貸は、遅くとも18世紀後期の江戸には少なからず存在し、安兵衛のような零細な小商人を得意客としており[69]、このような問題は明治期に入って初めて出現したわけでは必ずしもない。但し、特に大都市東京の小商人にとって、近世よりも明治期以降の方が、信用の問題は深刻化していたと考えられる。近世中期以降の都市の商人は、通常、職縁的団体である同業者仲間や、町人が都市の区画ごとに形成した町などの地縁的団体、同族団をはじめとする擬制的な血縁団体など、時に重なり合う多様な共同体に属しており、高利貸ではなく、それらを基盤とした信用を得る可能性も少なくなかったからである。こうした共同体の構成員間における信用の供与は、基本的に相互扶助的な性格を持っており、またこれらの様々な共同体に基づく無尽講も多数結成されていた[70]。しかし、明治期以降、これらの共同体は、その性質や地域等

---

[67]〔横山1899〕は、貧民で日済屋から借りて１度で関係を絶てる者はなく、日済屋と関係のある者は大抵１～２年前から貸借を永続していて、ついに一生その境涯から逃れることができなくなるのである、と述べている（56～57頁）。

[68] 明治10年太政官第66号布告第２条。なお、明治前期の法令の検索には「日本法令索引〔明治前期編〕」（https://dajokan.ndl.go.jp）を用い、法令本文は、「国立国会図書館デジタルコレクション」（https://dl.ndl.go.jp）収載の『法令全書』（内閣官報局、1887～1912）を参照した。

[69]〔北原1985〕12～24頁。

[70] もっとも、近世後期には、無尽講の性質や目的は多様化しており、中には、元来の相互扶助的性格を離れ、富籤のような射倖行為に近いものや取金にかなりの利子を付すものなども存在した。このような多様化に対応して、無尽に関

による時間差はあるものの、解体ないし弱体化し[71]、それに支えられていた信用のあり方も変容してゆく。そして、一葉がこのような変化を痛感していたことは、その日記に頻出する貸借関係の記述から窺える。

父則義を亡くして困窮するようになった一葉らが、借金の相手としてまず頼ったのは、事業に失敗する前の則義がその中心にあった、地縁や血縁に基づく共同体的連帯意識に支えられた集団の構成員達であった。もっとも、この集団の形成自体は幕末期に遡り、その中核となったのは、則義の父と親しかった、同じ甲州出身の農民で、江戸に出て士族の株を買い幕吏として出世した真下専之丞であった。則義と多喜は、この真下をモデルとし、甲州から江戸に来て、真下やその周囲の甲州出身者等の協力のもとに互いを親戚とする偽の親類書まで作り[72]、士族の株を手に入れる。世話好きであった真下は、食客を多く抱え、則義を含めて17名の者が士族身分を得るのを助けたとされており[73]、身分制度が揺らぎ始めた幕末期において、社会的地位の上昇のために、こうした人脈が利用されたことが窺える。そして、明治維新の直前に公職を辞した真下に代わり、当時は相対的には裕福であった則義がこの集団の要の役割を引き継いだが、真下のような求心力はなく、構成員との結びつきは金銭貸借を主とするものに変わっていったようであり、明治６、７年頃より多喜の弟などの同郷人に対して利息付きの金を貸し付けた記録が残っている

する研究文献は極めて多いが、例えば、研究史の概要は〔渋谷1983〕にまとめられており、村落に比すれば史料や研究文献の少ない都市の無尽も含む、全体的な概観を与えるものとしては、〔森1982〕がある。なお、無尽を支える思想、特にその相互扶助的な面に着目した興味深い研究として〔ナジタ2015〕も存在するが、細分化した実証的研究との隔たりは大きい。

[71] 例えば、株仲間の解放が明治初期に法令により断行された（〔宮本1938〕339～347頁）のに対して、東京においては、町は制度上の意味を失った後も、明治20年（1887）頃まではその共同性を維持しており、明治21年の東京市区改正条例による市区改正を機に変容してゆくという（〔松山2014〕第９章）。

[72] 真下専之丞を核とする集団の形成や、則義が作成した偽の親類書の詳細については、〔前田1978〕104～120頁、〔和田1954〕37～48頁参照。

[73] 〔阪本1914〕85頁。

という[74]。よって、明治初期において、既にこの集団の性格が変化し始めていることが窺えるが、利息付きとはいっても、基本的に月10円につき25銭の低利で貸し付けており[75]、信用の性質としては、高利貸よりは相互扶助的な無尽講に近いものであったと思われる。そして、多喜や一葉は、則義の事業の失敗と病死により、一転して苦境に陥った樋口家に対して、かつて則義の信用を受けた者達が、相互扶助の意識に基づいて信用を供与してくれることを期待した[76]。しかし、一葉の日記からは、こうした者達が、しばらくは多少の借金に応じているものの、借金の依頼が度重なってゆき、明治26年（1893）６月以降、一葉らが実業に就くための資金を借りようとすると、次々と断っていることが窺える。中でも、多喜の甥で、則義の存命中に樋口家に一時寄宿していたこともある廣瀬伊三郎が見せた反応は、もはや共同体的連帯意識が成り立たないことを一葉に思い知らせるものであった。ちょうどこの年の７月に、東京で商業をする目的で甲州を出て来た伊三郎は、親類の樋口家に対しても、貧民相手の高利貸によく見られた日歩貸しをしようとしたようであり、一葉は、日記に「ことばに絶たるもの也」と記している[77]。しかし、その後、他の親類縁者からも十分な信用を得られず、同年12月には、「伊三郎よ

---

[74]〔前田1978〕110頁、〔塩田1968〕90頁。

[75]〔塩田1968〕90頁。

[76] 直接の借金の依頼をめぐるやり取りとは異なるが、一葉と真下専之丞の孫渋谷三郎（後の阪本三郎）との縁談が破談になった原因も、樋口家側と渋谷側の信用をめぐる意識の相違にあったと言える。則義は、生前、司法官になることを目指して高等文官試験の準備をしていた渋谷に目をかけて一葉との縁談を持ち掛けていたが、明確には決まらないうちに死去した。そこで、則義に代わって多喜がこれを進めようとしたところ、渋谷が、自らが任官するまでの経済的援助の要求と推測される、「怪しう利欲にかゝはりたること」を言って来たために、多喜がひどく立腹し、破談となったという（「しのぶぐさ」明治25年９月１日、〔野口1998〕541頁）。その後、試験に合格し、新潟の検事に昇進した渋谷は、明治25年８月に突然樋口家を訪れ、以前は樋口家を「富有と斗思ひしかば無理をいひたる事も有し」と述べつつ、樋口家側からの希望という形での復縁を目論んだようであるが、多喜も一葉も取り合わなかった（「しのぶぐさ」明治25年８月22日、同年９月１日）。

[77]「につ記」明治26年７月12日。

り金五円かりる　高利の金にて俗に日なしといふもの也　かゝる事物覚えてはじめての事也」[78]と呆れつつも高利貸と同じ日済の形式で借りている。

高利貸に頼りたくはないが、伝統的な共同体的連帯を基盤とする信用はもはや得られない、と悟った一葉は、この後、連帯には頼らない、新たな信用を得る道を模索し始める。それは、一葉が、文学、具体的には歌道によって世に立つまでの間、その成業を見込んで信用を供与してくれる「学あり力あり金力ある人」[79]を探すことであった。明治27年２月には、本郷で天啓顕真術会を創設し人身の吉凶や相場の高低を予言して多くの会員を集めていた久佐賀義孝を訪ね、同年秋には、任侠小説を書いて人気を博し朝日新聞の専属作家となっていた村上浪六のもとを訪れて、支援を頼んでいるが、いずれもそれまで一面識もない相手であった[80]。結局、両者とも一葉の期待したような人物ではなく、久佐賀は経済的援助と引き換えに自分にその身を任せてくれないかと提案して一葉の怒りを買い[81]、村上は貸金の約束をしながら一度も果たさなかったようである[82]。しかし、このことは、信用のあり方が、特にその供与者の意識に大きく左右されることを一葉に印象づけ、後述のように石之助の人物像を精緻に造形することに寄与したものと考えられる。

こうした一連の経験を通じて、一葉は、安兵衛一家のような者達が高

---

[78]「塵中日記」明治26年12月７日。

[79] 初めて久佐賀義孝を訪ねた日の日記（「塵中日記」明治27年２月23日）に、「学あり力あり金力ある人によりておもしろくをかしくさわやかにいさましく世のあら波をこぎ渡らん」とある。

[80] 久佐賀との初めての面会については、明治27年２月23日「日記　ちりの中」に詳細に記されており、同年の秋に何度か村上を訪ねていたことは、村上の書簡（〔野口1998〕221 ～ 222頁）から読み取れる。

[81] このような久佐賀の申し出に対し、一葉は、「一道を持て世にたゝんとするは君も我れも露ことなる所なし　我れが今日までの詞今日までの行もし大事をなすにたると見給はゞ扶助を与へ給へ　われを女と見てあやしき筋になど思し給はらばむしろ一言にことはり給はんにはしかず　いかにぞや」という返信を送り、あくまで歌道によって世に立つまでの信用の供与のみを頼むという強い決心を示している（「水の上日記」明治27年６月９日）。

[82〔野口1998〕221 ～ 223頁、〔塩田1968〕535 ～ 545頁。

利貸に頼らざるを得なくなってゆく背景を、身を以て知ったのであり、それは、社会の下層の者達をも一定程度支えてきた伝統的な信用の形態が崩壊しつつある一方で、それに代わる新たな信用のあり方も創出されていない[83]という、まさに近代移行期の問題状況を示すものであったとも言える。但し、そうした中でやむなく高利貸の手に落ち、貧窮の一途を辿る安兵衛一家に、一葉は、ただ一つ、息子三之助の存在という大きな希望を残しておいた。孝行息子の三之助が一家にとって精神的にかけがえがないことはもちろんであるが、経済的にも、将来、高収入の職に就けば、一家を貧困から救うことができる[84]。身分制度が廃止された明治前期は、立身出世を目指すことが奨励された時代で、その手段として最も有効と考えられたのが学問であった。学校好きで「先生さまにも褒め物の子」(384頁) という三之助は、学問による立身出世をかなえる素質は持っているように見える。しかし、三之助の通う「五厘学校」(382頁)

---

[83] 明治期には、一方で、新たな金融機関として、庶民への金融を看板とする貯蓄銀行や信用組合が設立されるが、現実には質屋や無尽等に比して、庶民金融については十分な役割を果たしていなかった(〔由井1935〕13 ～ 21頁、〔全国相互銀行協会1971〕14 ～ 15頁)。さらに、近代的な社会保障制度の未整備という問題もあった。医療保険をはじめとする社会保険制度はまだ存在せず、明治７年に救貧法として出された恤救規則(明治７年12月８日太政官第162号達)は、依然として親族や地域における相互扶助を前提としていた上、身寄りがなく、かつ労働能力を欠く者のみを対象とした、極めて限定的なものであった。

[84] 安兵衛一家の裏屋住まいの様子は、かつて多喜が乳母として仕えていた、旧旗本稲葉家の没落しきった様子をモデルにしているのではないかと推測されており、稲葉家の正朔少年の姿は三之助の描写に影響を与えたと考えられている(〔湯地1926〕207頁)。『大つごもり』執筆の２年前の年末に、『暁月夜』の原稿料を受け取った一葉は、その中の金子少しを、樋口家以上に困窮している稲葉家に歳暮として渡そうと、その裏屋住まいを訪問し、畳がすり切れ、障子も破れ、夜具も手道具もない惨状を日記に記しているからである(「よもぎふにつ記」明治25年12月28日)。但し、そこには、正朔少年が、「成長くならば陸軍の将帥に成りて銀行よりいくらも金を持ち来たりて父も母も安楽にすぐさせん」、と常々言っている、と正朔の母が語ったことも書いてあるのに対し、『大つごもり』のテクストには、この発言は全く利用されていない。一葉が、孝行息子という点は参考にしながらも、三之助に軍人のイメージを結びつけることを慎重に排除したようにも見え、興味深い相違に思われる。

は、貧民の子のために、一日五厘と授業料を安価にし、都合のよい時のみでも通えるようにした学校であり[85]、まだ８歳であるのに貧乏ゆえに蜆売りをして家計を助けようとする三之助が、この先学校に欠かさず通い続け、上級の学校に進学するのは難しいことも示唆されている。実際、貧困と教育の問題は密接に結びついており、貧民窟を調査した横山は、貧民に不就学児童が多く、教育を受けられないために知識もなく思想も養えず、その結果、貧民の子は成長しても貧困から脱せず、すりや窃盗などの犯罪に手を染めることも少なくないことを指摘している[86]。大晦日という一時点に意識を集中する本作品では、三之助の将来の問題は具体的には述べられていないが、三之助がこの先、十分な教育を受けられるか否かは、高収入の職に就き税を納めて社会を支えるような人間になるのか、それとも貧困のまま遂には犯罪に手を出すようになるのか、に関わり、安兵衛一家のみならず、ひいてはその社会の将来を左右する射程を持つと言える。

３．お峯を追い詰める構造と盗み

この切羽詰まった安兵衛一家が大晦日を切り抜けるために金策を託されたのが、主人公のお峯である。お峯は、伯父の言葉によれば、山村家には１年前から下女として奉公しており、これが初めての奉公である（385頁）。秋に安兵衛が病にかかった時に、見舞いに行きたくとも、「六づかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は売りたるも同じ事」（381頁）と考えてあきらめていることから、恐らく奉公する際に、山村家から給金を１年分程度前借りし[87]、秋の時点ではまだその債務を返し切っておらず、債務奴隷のような状態にあったと言える。お峯が御新造に対して、山村家にとっては端金に過ぎない２円の借金をなかなか頼めないのは、既に指摘されているように、お峯に山村家に対する「雇傭関

---

[85]〔横山1899〕60 ～ 61頁の「五厘寺子屋」に関する記述を参照。

[86]〔横山1899〕379 ～ 382頁。

[87]〔朝日新聞社1999〕所収の「全国諸傭平均賃銀累年表（５）」によれば、明治27年の下女の月給の平均は、上等１円23銭、普通93銭、下等65銭、とあるため、およそ10 ～ 15円程度を前借りして働いているという設定であろう。

係というより主従関係に近い」[88]意識があるためでもあろうが、奉公時に給金を前借りしたという、この負い目も関わっていると考えられる。

一方、伯父夫婦に対しては、お峯は、父母を亡くした後に養育してくれた恩と、実の親に対するような愛情の両方を感じている。特に養育の恩については、義理の親子であるがゆえに負い目ともなり、孝行をせねばならないと追い詰められる面があると言える。こうした義理の親子関係ゆえに生まれる負い目や遠慮といった心理的負担の問題は、『冥途の飛脚』や『女殺油地獄』をはじめとする作品において、近松が繰り返し描いたものであった。テクスト上、近松の影響は西鶴ほど顕著ではないため、その自覚的な受容の結果か否かは判然としないが、強い愛情で結ばれたお峯と伯父夫婦と、これとは対照的な御新造と石之助、という二組の義理の親子を登場させ、お峯の負い目に加えて、御新造にさえ、内心では石之助が憎くても表向きは邪険にできないという義理の関係ならではの遠慮がある、と描いている[89]ことは、一葉がこの問題をよく認識していたことを窺わせる。

こうしてお峯は、山村家と伯父夫婦の双方に負い目を感じつつ、御新造の機嫌を見計らって借金を頼み、一旦は請け合ってもらうが、大晦日当日、石之助がいて不機嫌な御新造は、約束を反故にする。娘のもとに出かけた御新造と入れ替わりに、寒空の下、初音町からの長い道のりを歩き通してきた三之助が来てしまい[90]、手ぶらで帰らせることもできない、といよいよ心理的に追い込まれたお峯は、悪人にはなりたくないと思いながらも、ついに懸け硯の束になった金から２円を盗み、三之助に渡してしまう。２円は束の封金から抜き取ったため、一見したところ減っ

---

[88]〔前田1974〕184頁。

[89] 石之助が家に帰って来た場面において、「憎くしと思へど流石に義理は愁(つ)らき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小抱巻(こかいまき)何くれと枕まで宛がひて」(387 ～ 388頁)、と御新造の様子を描写している。

[90〔高田1984〕15 ～ 17頁によれば、初音町から白金台町までの、直線でおよそ８キロ半の距離は、生涯東京市の外に出ることがほとんどなかった一葉の実感できた最遠距離にほぼ匹敵し、８歲の三之助が半日がかりで徒歩で往復するこの距離の圧力も、お峯を窃盗行為にまで追いつめていく装置として、大きな役割を果たしているという。

ていると分からないことも、あたかも短期の信用を受けただけであるかのように、後日、人知れず返しておくことができるのではないか、との期待を抱かせ、盗みへの心理的ハードルを低くしたと考えられる。

「鬼の主」を持ちながら、裏表なく勤めに励み、「辛棒もの」、「感心なもの、美事の心がけ」(380～381頁)、と他人にも褒められる模範的な下女であったお峯が、ついに盗みに手を出すまでに追い詰められてゆくという、この状況と心理の描き方は真に迫っているが、僅かな文言ではあるものの、未定稿から定稿への段階で書き換えがなされている点も注目に値する。２円を盗む直前、お峯は心の中で神仏を拝みつつ、未定稿では「私は悪人でござります」(397頁) と語るが、定稿では「私は悪人になりまする」(390頁) に変わっている。未定稿においても、その後に、「なりたくはなけれど悪人にならねばなりませぬ」(397頁) とあり、「なる」という動詞が既に使われているため、定稿との相違は僅かではあるが、定稿において「なる」に統一したことの意義は無視し得ない。定稿の方では、元来は決して「悪人」ではなかったお峯が、自らの意思にかかわらず、自らを取り囲む状況によって「悪人」に変化させられてゆく、つまり環境や社会が犯罪者を創り出す、というニュアンス[91]が明確に表されている。

但し、お峯は状況に流されてゆく受身一方の人間として描かれているわけではない。「常々をとなしき身」(389頁) で御新造に歯向かうことなどなかったお峯であるが、その夜、奥の間の御新造から懸け硯を持って来るように言われて盗みの発覚を予期すると、大旦那の前で御新造の無情を言ってのけ、盗みを白状し、伯父が共謀していないことだけは述べて、信じてもらえねばその場で舌を噛み切って死のう、と開き直ったように覚悟を決める。自死により潔白を示し自らを追い詰めた者への抗議の意を込めるという、いわば命を懸けたポトラッチ[92]は、前近代以来の

[91] この点は、ユーゴーの文学の解釈として森田思軒が提唱した「社会の罪」という発想に近い。〔木村2017〕７～12頁は、『にごりえ』について、この発想の受容を指摘するが、西鶴の受容のように明確に跡付けられるわけではないものの、『大つごもり』にもそれが何らかの影響を及ぼした可能性は十分にあり得る。

[92] 自死は、自らの全てを相手に差し出すことで、相手がそれ以上のものを返

もので、特に武士の間に強く見られた考え方である。

もっとも、捨て身の覚悟をしたからといって、不安が全て消滅するわけではなく、奥の間へ向かうお峯の心の内は「屠処の羊」(393頁) であった。この場面のお峯には、貧窮生活の中でも士族の娘という矜持を失わず、名誉や義侠を重んじる意識を日記において繰り返し示し、それを踏みにじろうとする社会に対して鋭い批判精神を発揮する一方で、信用を得られずに苦しみ、先の見えない心細さを抱え続けた、一葉自身の姿と意識が投影されているように見える。

４．放蕩息子石之助

最後に、本作品の最大の特徴と言える放蕩息子の石之助について見ておきたい。石之助は、通常ならば重んじられる総領息子であるにもかかわらず、継母の御新造に嫌われ、父の愛情も薄く、妹達も怖がって寄り付かないため、家族内で孤立している。この点は、同じく文芸上の放蕩息子でも、西洋喜劇の放蕩息子が、父とは対立しても母や姉妹は味方にしていることや、近松の世話物の放蕩息子が、時に親子の思いが食い違うことがあっても、基本的に親から強い愛情を受けていることとは対照的である。

石之助の放蕩もこの家族関係と密接に関わっている。先述の通り、そのきっかけは、自分を養子に出して妹娘に家督を継がせようとの相談を耳にしたことであり、放蕩は養子の話を潰して継母を困らせるためでもあった。石之助の思惑通りに放蕩で養子の貰い手がなくなると、御新造らは、財産を少し分与して「若隠居の別戸籍に」という算段をするが、石之助は、今度は法外な「分配金」や「隠居扶持」などの条件を出して反抗する (387頁)。本作品の発表時には、明治民法はまだ施行されていないが、相続の法制上の原則は嫡長男子の単独相続で、それによれば石之助は推定家督相続人であり、相続させられないやむを得ない事由があると被相続人が認めた上で親族協議の手続を経ないと、廃除はできなかっ

すことを不可能にし、その結果、一気に形勢を逆転して相手の上に立つという意味を持つ、ポトラッチであると言える。

た[93]。そして、石之助自身も、本来自分が山村家にいるべき人間であると意識し、それを家族にも知らせようとしていることは、未定稿から定稿への間で書き換えられた部分にもはっきりと示されている。未定稿では、父から金を受け取った石之助は、山村家を出る際に、お峯に下駄を直させた上で、「御玄関からお帰りだぞ」(399頁) と述べる。この言葉では帰る場所が山村家以外にあることになってしまうが、定稿では、「お玄関からお帰りでは無いお出かけだぞ」(392頁) と言って、帰る場所は山村家であるから、この家から出るのは「お出かけ」に過ぎない、と明示している。これは、むろん、その前の「さあ行け、帰れ、何処へでも帰れ」(392頁) という父の言葉に対抗するものでもあり、言葉に対する石之助の敏感さを表す台詞と言える。また、釣りから帰った父に金の無心をする時は、花札賭博の借金という、山村家の体面を気にする父にとっては表沙汰になると都合の悪い理由を口実にしており、ここからも石之助の狡猾なまでの利口さが窺える。「子供の時には本の少しものぞいた奴」(392頁)、という父による評もあり、一定の教育は受けていて、15歳で家督相続の件を聞いて敢えて放蕩を始めるなど、早くから鋭い知性と感性を備えていたことも推測される。

そのような石之助の性質は、風変わりな放蕩の内容にも表れており、それは決して自暴自棄によるものなどではなく、いわば計算されたものである。石之助は、品川の遊廓の宴席でその座限りの散財をすることはあっても、一人の遊女や娘に入れあげる近松の世話物や西洋喜劇の放蕩息子とも、西鶴の浮世草子に見える、遊興にはまって身代をなくす商家の二代目[94]などとも異なり、車町の破落戸や伊皿子あたりの貧乏人などに、酒や肴をおごって喜ばせることを道楽としていた。このため、先行研究では、石之助は、「山村家―富める世界への反逆者」[95]とか、「『正直律義』の欺瞞のもとに弱者を抑圧してはばからない山村家の贖罪を代行

[93] 〔高柳1951〕475 ～ 478頁。但し、放蕩や無頼は廃除原因にはなり得るため、石之助の地位は危うく、被相続人たる大旦那と親族の意思にかかっていると言える。

[94] 『日本永代蔵』巻1-2「二代目に破る扇の風」には、その典型例が見られる。

[95] 〔松坂1970〕129頁。

している」[96]などと位置付けられてきた。石之助が結果的に「富める世界」の山村家から「弱者」の世界へと金銭を回している面があることは確かであるが、テクストの具体的な記述からは、一葉が、石之助の性質や放蕩の意義を、より精密に捉えていることが見て取れる。例えば、貧しい者に対する石之助の贈与のあり方について、未定稿と定稿の間に差異があることは、一葉がこの点に非常な注意を払ったことを示唆するものとして注目される。定稿において、石之助が山村家から金を巻き上げ、よい正月を迎えさせてやる、と言って、「伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして」(387頁) とある部分は、未定稿においては、「伊皿子あたりに子方といひて寒空に尻切の半てん、さらずば半馬鹿に取どころなき子僧などを可愛がりて」(394 ～ 395頁) となっていた。子分という意味の「子方」の語が示しているように、未定稿においては、石之助と特定の個人の間に、親分・子分のような関係、あるいは特別の強い絆があると読めるが、定稿においては、この部分を削除し、より抽象化した「貧乏人」に変えているため、石之助と贈与の相手との間に、個人的な強い連帯の関係があるとは限らず、少なくともそうした関係があるがゆえに贈与しているわけではないことになる。これは、一葉が、贈与が往々にして親分・子分のような支配・従属関係を発生させることを警戒し、石之助は、相手がそれ以上返せない贈与をすることによって相手を自らの支配下に置くというポトラッチをするようなメンタリティーの持主ではなく、破落戸や貧乏人と付き合っても徒党は組まず、連帯の関係になくても助ける、ということをはっきりさせるためではないかと思われる。要するに、石之助の活動は、特定の貧困者と連帯し、これに信用を与えて救うことを直接の目的としたものではなく、高度に自律的に信用を供与する新しいあり方を目指すことによって、社会の広い層にそれを行き渡らせようとするものであると言える。

贈与、あるいは信用の供与についての石之助の意識が、より明確に表れるのはお峯の救済の部分である。懸け硯の中の「引出しの分も拝借致し候」(393頁) という石之助の受取一通でお峯が助かったことについては、大別すると、石之助がお峯の盗みを承知で行ったという説と、偶然

[96] 〔前田1974〕206頁。

助ける結果になったという説が出されていたが、お峯が盗みを行った場面の「見し人なしと思へるは愚かや」(390頁) という一節を主たる根拠として、後者の説は、現在では基本的に否定されている[97]。但し、その一方で、一葉が、読者に対しても石之助が助けたと露骨には示さず、お峯に対しては石之助が知っていて助けたと決して明白には知らせないように心を砕いたことも確かである。そのことは、未定稿では、石之助が、お峯の盗みの現場を目撃し、「折柄我れにも入用あり、罪はお序(ついで)に背負てやるべし」(397頁) と積極的にその罪を被るつもりで残りの束をふところに入れた上、寝たふりをしている場面を描いていたのに対し、定稿ではこの場面を全て削除していることによく表れている。これにより、「見し人なしと思へるは愚かや」の一節は、その時点では謎を残しつつ、読者の興味を結末へと掻き立ててゆくことになり、非常に効果的な改変と言える。

そして、匿名でそっと間接的に融通するという、この石之助による助け方については、前田愛氏によって、諸国の怪奇談や珍談を集めた西鶴の浮世草子『西鶴諸国ばなし』の巻1-3「大晦日はあはぬ算用」という作品がヒントを与えたのではないか、と推測されている[98]。この話は、大晦日の品川を舞台としており、時間的設定も空間的設定も『大つごもり』に近い。その概要は以下の通りである。

品川で借家住まいをしている原田内助という貧乏な浪人が、神田に住んでいる義兄の医者に無心したところ、「ひんびやうの妙薬、金用丸、よろづによし」との上書を付した金子10両を贈られる。原田は喜び、大晦日に浪人仲間７人を招いて宴を開き、これを披露するが、皆が見て回した後に仕舞おうとすると、１両足りないことが判明する。それぞれ探し回り、上座から一人ずつ順に帯まで解いて改める中で、運悪く１両持ち合わせていた３人目の男が、身の潔白を示すために切腹しようとした時、「小判はこれにあり」、と行灯のかげから誰かが１両を投げ出す。しかし、その後、原田の妻が重箱の蓋に１両が張り付いていたと持って来て、投げ出された１両は、仲間の一人が切腹しようとした者を助けるた

[97] 〔松坂1970〕127 ～ 130頁。
[98] 〔前田1974〕200 ～ 202頁。

めに密かに出したものと分かる。誰も名乗り出ようとしないため、結局、亭主の原田の考えで、１両を一升枡に入れて庭の手水鉢の上に置き、提供した者が黙って持ち帰れるように一人ずつ帰し、全員が帰った後に原田が手燭を灯して見ると、１両はなくなっていた。

目録において、この作品のタイトルの下には「義理」と書かれているが、西鶴にとって、「義理」とは、基本的に、自己の受けた信頼や好意に対していかなる犠牲を払っても応えようとする精神的態度や、生命を賭して自己の名誉を守ろうとする意地であり、その関心の中心にあった町人の世界にはなく、武士の世界のものであった[99]。もっとも、この話に登場するのは、武士といっても禄を得ておらず、中間層の町人よりも明らかに窮迫している浪人達であり、この点は一葉との関係を考える上でも軽視できない。零落して都市の下層民と変わらない貧窮生活を送りながらも、士族の娘という自意識を持ち続け、人としての誇りを重んじる一葉が、類似の境遇にある浪人達の機転のきいたやり方とその裏にある仲間への思いやりに共感し、『大つごもり』創作時に、これを強く意識した可能性は高いであろう。よって、『世間胸算用』と共にこの作品の影響を指摘する前田氏の着眼は鋭いと言えるが、この作品を一貫しているものは「町人のタテマエとされる蓄積の論理への無言の侮蔑」であり、武士の世界では「消費と贈与の論理」が優先し、「金銭は贈与の対象であり、情誼と信義の証し」であるとした上で、蓄積の論理を『大つごもり』の大旦那と御新造、贈与の論理を石之助とお峯に結びつける前田氏の理解[100]は、両作品の要点とその間の複雑な関係を必ずしも捉え得ていない

---

[99]〔源1969〕72 ～ 76頁。但し、源氏は、「大晦日はあはぬ算用」の義理は、「相手、もしくは当事者の立場を傷つけないよう、その場において最もふさわしい、しかるべき処置をするもの」（78頁）で、解釈が非常に難しいが、好意や信頼に対する呼応としての義理や名誉を守るために命を賭す義理とは異なった系列に属する、と述べている（82頁）。確かに、この作品の「義理」は、自己の名誉よりも相手の立場や好意を尊重することに重点がある点で、『武家義理物語』などで多く描かれている義理とは若干異なっており、一葉がこの作品に敢えて着目したことは、その関心の在り処と西鶴の受容の主体的なあり方をよく示しているように見える。

[100]〔前田1974〕200 ～ 202頁。

ように思われる。

まず、前田氏の理解では、両作品が「蓄積」に否定的で「贈与」に肯定的であるように見えるが、西鶴も一葉も贈与一般を肯定しているわけではない。両者は共に、贈与が受贈者に負い目を感じさせ、それが人間関係に深刻な影響を及ぼすという可能性に極めて敏感であり、特に『大つごもり』からは、贈与が贈与者と受贈者の間に支配・従属関係を発生させる危険性を、一葉が強く警戒したことが窺えた。だからこそ、両者は贈与あるいは信用の供与のあり方に、並々ならぬ注意を払うのである。後述のような浪人原田の描き方にも表れている、西鶴が武士に対して見せる、距離をとった態度に鑑みると、「大晦日はあはぬ算用」の末尾の「あるじ即座の分別、座なれたる客のしこなし、かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし」という記述を、単に武士の交際に対する言葉通りの称賛と捉えることはできないであろう。しかし、ここからは、西鶴の関心と評価の対象が、貧しい浪人がなけなしの１両を仲間のために惜しみなく与えたことよりも、仲間に負い目を負わせないように匿名でさりげなく助けるという、その客の洗練された方法と、その意を汲んで匿名性を保ったまま返す方法を考えた亭主の思慮にあったことは、明らかに窺える。そして、一葉もまさにこの点に着目したからこそ、石之助がお峯に金銭を直接渡すのではなく、お峯に負い目を与えないように、素知らぬふりでいつもの放蕩と見せかけて助ける、という形を敢えて選択したと考えられる。

その上で、西鶴と一葉の差異も重要である。西鶴が描いたのは、武士、しかもよく似た境遇の貧しい浪人仲間の間の話である。浪人仲間には格別の心遣いを見せる亭主の原田は、その一方で、作品の冒頭において、掛け取りに来た米屋の若い者に対して、「朱鞘の反（そり）をかへして」にらみつけ、春まで待つように脅すような、「すぐなる今の世を、横にわたる男」とされている。浪人仲間への義理堅さと町人に見せる居丈高な態度とのギャップから生まれる滑稽さは、「町人である西鶴の企んだ皮肉」[101]とも評されているが、換言すれば、格別の付き合いや連帯感は、同じ武士身分で貧富の程度も等しく長期的な関係のある仲間という、ごく狭い共同体の中でしか成り立っておらず、このような洗練された贈与、あるいは

[101] 〔湯沢1983〕36頁。

信用の供与は、その中でしか行われないということである。これに対して一葉は、『大つごもり』において、石之助が、階層も境遇も大きく異なる上、それまで特別親しかったわけでもないお峯、ひいては安兵衛一家を、西鶴が描いたような洗練された方法で助けることを示した。すなわち、武士の強固な連帯を基盤にしようとした西鶴とは対照的に、およそ連帯に依存しない形の、新たな信用のあり方を目指したと言える。こうした信用が成立し得るか否かにとって、信用供与者である石之助の意識は鍵となる。石之助は、富裕な山村家の人間ではあるが、家内で孤立しており、不動産に依拠して得た利益を貯め込んで外に回そうとしない大旦那や御新造とは真っ向から対立する意識を持つ。徒党は組まず、広く信用を行き渡らせようとし、貧困者に対しても施しをするのではなく、自立し得る者として対等に尊重し、その誇りや尊厳を傷つけない形でそこに信用が入ってゆくように取り計らう存在であった。田町の高利貸からの借金が安兵衛一家を窮地に陥れたように、貧困者への信用のあり方は、貧困の深刻化の主因にもなり得る。よって、石之助は救貧を直接の目的としたわけではないが、土地や権力の関係から距離をとるのはもちろん、連帯の関係にも敢えて依存しない、石之助のような意識を備えた者からなる、高度に自律的な短期信用の世界が成立することが、貧困問題の解決にとっても不可欠である、と一葉は考えたのであろう。

結.

石之助という放蕩息子の意識に支えられた、連帯に依存しない信用のあり方は、一葉が、主に近世前期の都市町人の金銭問題を対象とした西鶴から重要な手掛りを得る一方で、当時とは異なり、無尽講や様々な相互扶助の基盤となっていた共同体やそれを支える連帯意識が、特に大都市においては弱体化しているという明治前期～中期の状況を自ら痛感しつつ、新たに考案したものであった。この連帯に依存しないという点は、西鶴と同様に近世前期の町人社会に着目し、権力や土地の関係から距離をとった、自律的な商業世界の成立を目指した近松[102]との相違点でもあ

[102] 信用をめぐる近松の意識については、『冥途の飛脚』を分析対象とする別稿

ると言える。近松は、そのためには、西鶴と異なり、各人が弱者を顧みずに私利を追求するのではなく、弱者であっても踏みつけにされず、水平的に連帯し合える関係を構築することが重要であると考えており、貧困者であってもその尊厳は重んじられるべきであり、この自立を助けることが長期的には経済社会全体を支えることにもなる、と見通した一葉は、その点では西鶴よりもむしろ近松に近い。しかし、近松が、株仲間や町といった共同体が集団として個人を抑圧しがちになる面に対しては批判を向けつつも、個人同士の強い絆に基づく水平的な連帯を信用の基盤として重視したのに対して、一葉は、そうした連帯にさえ頼らない形の信用を追求し、さらに高度な自律性を達成しようとしたと考えられる。

もっとも、当時の日本社会において、現実に、石之助のような意識が醸成され、それに支えられた信用が成立し、お峯のような貧困者にまで信用が行き渡る可能性は乏しかったと思われる。その問題については、一葉の他の作品や当時の現実の状況等の、より踏み込んだ分析を必要とすると考えている[103]が、『大つごもり』においても、実現の困難さは既に示唆されている。石之助は、山村家が不動産を基盤として得た金銭を別の経済活動に投下し、新しい短期信用の世界を作ろうとしているが、自身が山村家の財産を相続するという地位を追われそうになっており、他に収入を得る道を確保しているわけでもなく、その将来は不安定である。石之助の意図を理解し得るであろうお峯、及び安兵衛一家が、もし貧困から脱して自立すれば、今度は石之助の側を支えることが可能となるが、大晦日は乗り切れても、３か月後、あるいはその先に、高利貸との関係を清算できるあてすらない。一葉に、このような長期的な見通しに対する厳しい認識があったからこそ、『大つごもり』は、かえって、石之助があたかもお峯の「守り本尊」（393頁）であるかのようにその危機をそっと救い、大晦日の闇が終わり豊かな新春を迎えて光がさす、そ

においても、より詳細に分析する予定であるが、差し当たり〔桑原2013〕840～853頁参照。

[103] 『大つごもり』や一葉の他の作品が、同時代の作家に与えたインパクトは決して小さなものではなかったが、その問題意識が、同時代及び後世の作家等にどのように受け取られたかについての考察も、今後の課題とする。

の一瞬に焦点を当てて、問題の所在と新しい信用の可能性を極めてインテンシヴな形で示す作品になり得たのではないかと思われる。

【引用文献一覧】

穴沢清次郎「一葉さん」（吉田精一編『樋口一葉研究』、新潮社、1956、初出は1953）
朝日新聞社編『明治・大正期日本経済統計総観』下巻（復刻版、並木書房、1999）
近石泰秋「一葉と近松」（『国語と国文学』36-9、1959）
冨士昭雄･広嶋進校注･訳『新編日本古典文学全集69　井原西鶴集④』（小学館、2000）
平凡社編『日本歴史地名大系　13　東京都の地名』（平凡社、2002）
平出鏗二郎『東京風俗志』上・中（冨山房、1899・1901）
平田禿木『禿木遺響　文学界前後』（四方木書房、1943）
広嶋進「町人物の展開と晩年の達成――「失敗」と「苦境」を描く作品の誕生――」（谷脇理史・広嶋進編『西鶴を楽しむ　別巻②　新視点による西鶴への誘い』、清文堂出版、2011）
今井恵子「新・歌人群像　樋口一葉　言葉の鍛錬としての和歌修行」（『NHK 短歌』2009年３月号）
亀井秀雄『増補　感性の変革』（ひつじ書房、2015、初出は1983）
橘川武郎・粕谷誠編『日本不動産業史』（名古屋大学出版会、2007）
木村洋「「社会の罪」の探索――徳富蘇峰、森田思軒、樋口一葉――」（『日本近代文学』97、2017）
北原進『江戸の高利貸』（角川文庫、2017、初出は1985）
桑原朝子「近松門左衛門『大経師昔暦』をめぐって（１）（２・完）――貞享改暦前後の日本の社会構造――」（『北大法学論集』64-2・64-3、2013）
前田愛「『大つごもり』の構造」（『樋口一葉の世界』、平凡社、1993、初出は1974）
前田愛「一葉日記覚え書」（『樋口一葉の世界』、平凡社、1993、初出は1978）
松坂俊夫「「大つごもり」論」（『樋口一葉研究』、教育出版センター、1970）
松山恵『江戸・東京の都市史　近代移行期の都市・建築・社会』（東京大学出版会、2014）
源了圓『義理と人情』（中央公論社、1969）
宮本又次『宮本又次著作集　第一巻　株仲間の研究』（講談社、1977、初出は1938）
森嘉兵衛『森嘉兵衛著作集　第二巻　無尽金融史論』（法政大学出版局、1982）

無腸道人（磯野徳三郎）『依緑軒漫録』（日本新聞社、1893）
宗政五十緒・松田修・暉峻康隆校注・訳『新編日本古典文学全集67　井原西鶴集②』（小学館、1996）
内閣官報局編『法令全書』（内閣官報局、1887 ～ 1912）
テツオ・ナジタ『相互扶助の経済　無尽講・報徳の民衆思想史』（五十嵐暁郎監訳・福井昌子訳、みすず書房、2015、英語版は2009）
中込重明「樋口一葉「経つくへ」・「大つごもり」典拠考」（『日本文学誌要』65、2002）
夏目漱石『虞美人草』（新潮社、1951、初出は1907）
夏目漱石「現代日本の開化」（猪野謙二編『明治文学全集55　夏目漱石集』、筑摩書房、1971、初出は1911）
野口碩「解説」（前田愛・野口碩校注『全集　樋口一葉③　日記編〈復刻版〉』、小学館、1996、初出は1979）
野口碩校注『全集　樋口一葉　別巻　一葉伝説』（小学館、1996）
野口碩編『樋口一葉来簡集』（筑摩書房、1998）
野間光辰校注『日本古典文学大系48　西鶴集下』（岩波書店、1960）
岡保生「一葉と『文学界』」（『国文学　解釈と鑑賞』39-13、1974）
大崎辰五郎口述「大崎辰五郎自伝」（横井金谷・大崎辰五郎・添田啞蟬坊『日本人の自伝23　金谷上人御一代記・大崎辰五郎自伝・啞蟬坊流生記』、平凡社、1982、初出は1903）
阪本三郎『晩菘余影』（阪本三郎、1914）
笹淵友一編『明治文学全集32　女学雑誌・文学界集』（筑摩書房、1973）
渋谷隆一「無尽」（加藤俊彦編『日本金融論の史的研究』、東京大学出版会、1983）
塩田良平『樋口一葉研究＜増補改訂版＞』（中央公論社、1968）
塩田良平・和田芳恵・樋口悦編『樋口一葉全集』第一巻・第三巻（上）・（下）（筑摩書房、1974・1976・1978）
鈴木博之『シリーズ日本の近代　都市へ』（中央公論新社、2012、初出は1999）
鈴木淳『樋口一葉日記を読む』（岩波書店、2003）
台東区立一葉記念館編『樋口一葉・資料目録』（台東区立一葉記念館、新版2006）
高田知波「距離の物語――『大つごもり』への一視点」（『樋口一葉論への射程』、双文社出版、1997、初出は1984）
高柳真三「明治前期家族法概観」（『明治前期家族法の新装』、有斐閣、1987、初出は1951）
竹野静雄『近代文学と西鶴』（新典社、1980）
竹野静雄「西鶴の「大晦日」――『世間胸算用』の時間――」（『二松：大学院紀要』

18、2004）
滝藤満義「『大つごもり』――「はなし」の方法――」（『国語と国文学』73-2、1996）
谷脇理史・神保五彌・暉峻康隆校注・訳『新編日本古典文学全集68　井原西鶴集③』（小学館、1996）
暉峻康隆『西鶴　評論と研究』上（中央公論社、1948）
暉峻康隆・東明雅校注・訳『新編日本古典文学全集66　井原西鶴集①』（小学館、1996）
徳富蘇峰主筆『国民新聞』明治23年（1890）６月20日号
東陽堂編『新撰東京名所図会』第22編・第33編・第34編・第44編・第49編（東陽堂、1900 ～ 1907、順に〔東陽堂1900〕・〔東陽堂1902a〕・〔東陽堂1902b〕・〔東陽堂1906〕・〔東陽堂1907〕と略記）
東陽堂編『大日本名所図会　第82編　東京近郊名所図会　第７巻』（東陽堂、1910）
和田芳恵『樋口一葉』（新潮社、1954）
横山源之助『日本の下層社会』（岩波書店、1949、初出は1899）
湯地孝『樋口一葉論』（至文堂、1926）
由井健之助『頼母子講と其の法律関係』（岩波書店、1935）
湯沢賢之助「「大晦日はあはぬ算用」をめぐって――西鶴武家観の一端――」（『日本文学』32-7、1983）
全国相互銀行協会編『相互銀行史』（全国相互銀行協会、1971）